

28PA-am144

集中治療室専任薬剤師による能動的介入事例の分析と考察

○小原 健人¹, 橋本 昌宜¹, 高橋 千紘¹, 平綿 洋子¹, 矢野 忠¹, 市川 訓¹ (¹東海大病院薬)

【目的】当院集中治療室（以下、ICU）では最適な薬物治療を実施するために、重症患者の多岐にわたるプロブレムをもれなく評価する方法として「器官系統別評価」を用いている。今回、「器官系統別評価」の実施をもとに、能動的に介入した事例(処方提案)を分析し、ICUにおける病棟薬剤業務の評価と今後の業務展開について検討した。

【方法】平成 29 年 4 月から 10 月までの 7 か月間で介入した ICU 専任薬剤師による処方提案について、1) 器官系統別、2) 介入理由別に集計し、分析を行った。疑義照会および薬物血中濃度測定に基づく処方提案は除外した。

【結果】全処方提案件数は 219 件であり、提案内容の受諾件数（割合）は 170 件（78%）であった。1) 器官系統別では、「感染」58 件、「腎/透析」48 件、「栄養」30 件の順で件数が多かった。件数が低かった項目は、「中枢神経」7 件、「循環」5 件、「呼吸」3 件などであった。2) 介入理由別では、「薬剤追加・削除・変更」91 件、「用法・用量の適正化」89 件の順で件数が多かった。

【考察】処方提案が多かった項目に関しては、敗血症を始めとする重症感染症の発症や腎代替療法施行の頻度が高いこと、適切な栄養療法で異化亢進を防止する必要があるためと考える。このため、これらの項目は今後も重点的なモニタリングを通して、積極的な処方提案を行う必要がある。一方、処方提案が少なかった項目に関しては、介入可能なポイントを調査・分析し、能動的介入につなげていく必要がある。今後はより適切な介入を行うために事例分析を繰り返しながら、介入基準の標準化や ICU 担当者用教育プログラムの策定などを通して、能動的介入の質向上に取り組んでいく。